

# 旅する女ごころ

吉永みち子氏 ノンフィクション作家

根っからの旅好きを公言する吉永みち子さん。

少女時代の夢は旅行会社の添乗員になって世界を駆け巡り、旅ざんまいの日々を送ることだったそう。

「だから本当は、そちら側にいるはずだったんですよ」という吉永さんが、

旅する女ごころをユーモアを交えて解説する。

私が子供だったころは、まだレジャーとしての旅行が定着する前。遠く離れた土地の情報を地元で知る機会はほとんどありませんでした。そんな時代に、年1回やって来る富山の薬売りが語ってくれる各地の土産話は、私の大きな楽しみでした。

列車を眺めるのも大好きでした。当時、暮らしていた埼玉県川口市の自宅近くには東北本線が通っており、屋根に真っ白な雪を乗っけて駆け抜けていく列車を見送りながら、北国の雪景色に思いをはせたりしていました。

そんな私が中学3年のときに開催された東京オリンピックは、ショッキングな体験となりました。居ても立ってもいられなくなり、2週間の大会期間中は、選手村がある原宿に学校を休んで通いつめ、外国人をつかまえては拙い英語で「ホエヤーアーユーフロム？」とやっていました。

オリンピックが終わって登校すると先生にはこっぴどく叱られましたが、私には進みたい道が見つかった収穫の方が重要でした。もっといろいろな国の人々と話をしたい。海外へ行きたい。通訳ができる語学力を身につけ、旅行の添乗員になれば世界中へ行ける。そのためには外国語の勉強ができる大学へ進学しよう。中学生の段階で、すでにそう決心しておりました。

## 夢破れても旅心は健在

東京外国語大学のインドネシア語学科に何とかめぐり込み、これで半ばは夢にゴールインしたものと喜びましたが、人生の旅はままたまらないものです。

学生運動の嵐が吹き荒れていた時代で、入学後わずか3カ月で大学がバリケード封鎖され、それが解除されると今度は学校側がキャンパスをロックアウト。何もしないうちに大学3年生になってしまいました。その間、自主的にコツコツ勉強していたまじめな学生はいざ知らず、私は完全に語学に関して落ちこぼれになりました。通訳や旅行会社の夢は破れ、酒浸りの日々。

ちょうどそのころに出会ったのが競馬の世界です。それまで見たこともない、まったく知らなかった世界の存在を知り、すっかり虜になりました。しかし当時、馬の世界は完全な男社会。それでも競馬記者なら女でもできると考え、自分から競馬の新聞社に売り込みに行き、記者になりました。

旅行会社への夢は破れましたが、競馬記者になってからも旅好きは相変わらずでしたから、いろいろと工夫しながら旅ごころを慰めました。たとえば路線バス。通勤に使う路線バスも、旅だと思って乗れば景色が変わるものです。休みの日には、目的も定めず最初に来た路線バスに乗り、適当な場所で降りて散歩を楽しみ、また次に来たバスに乗り込む。そうやって1日中、都バスに乗って楽しんだりしていました。散歩だって立派な旅のカタチです。

これまでを振り返ると、私は常に生き方も含めてさまざまな旅を楽しんできたように思いますが、いまや実際に各地に旅する行動的な女性がとて多くなっています。それも中高年女性たちです。お金があつて時間もあり、体力も残っている。そして食欲に、ありとあらゆることを楽しめるのが女性の強みです。

## 憧れの寝台特急に乗り遅れ

友人と2人で、憧れの寝台特急列車「トワイライトエクスプレス」の旅を楽しんだことがあります、実に印象的な旅になりました。というのも肝心な列車に乗り遅れたからです。

そもそも、この列車は大人気で切符がなかなか取れない。しかも日本海に沈む夕陽を車窓から楽しめる季節の切符を、ピンポイントで狙いましたから入手難度はさらに上がります。旅行を決めてから切符が取れるまで5年がかりでした。その5年間に旅の計画を完璧に練り上げ、時刻表も穴が開くほど読み込みました。ところが肝心の出発日の大阪発車時刻が、わずかに前倒しになっていたのです。そうとも知らず、余裕で乗り込めるはずだった憧れの寝台特急が乗車寸前に動き出し、私たちは茫然と見送るしかありませんでした。

しかし5年がかりの旅行計画です。諦めるわけにはいかず、すぐさま新幹線と別の特急を乗り継いで追いかける決断をし、新幹線で京都へ向かい、京都から特急「サンダーバード」に飛び乗りました。検札に来た車掌さんに切符を見せて事情を話すと、敦賀駅には先に着くので後から来る「トワイライトエクスプレス」に乗り込めると教えてくれました。しかも事情を連絡しておいてくれたと言います。ホッとして友人と祝杯を挙げていると、琵琶湖畔を走りながら、景観を説明する素敵なお車内アナウンスが流れてきました。聞けば当日、「トワイライトエクスプレス」にも乗務経験のある車掌さんが乗っていて、特別に「トワイライトエクスプレス」と同じアナウンスをしてくれたそうです。敦賀駅で降車する際には、車掌さんらが拍手で見送ってくれました。

「トワイライトエクスプレス」の旅のはずでしたが、必ず思い出すのは「サンダーバード」での体験です。

列車に乗り遅れるという大失態を演じながらも、想定外の旅を大いに楽しめたのは、女性同士だったからでしょう。夫婦だったら責任のなすり合いで大ゲンカです。そもそも女性の旅は、男性の直線的な旅とは違い、曲線だったりジグザグだったりするのが特徴。目的へ一直線ではない。ふと目に入ったものに関心が向けば、そちらへ移動し、見知らぬ人との会話から、次の行動が決まったりする。



### Profile

よしなが みちこ ● 1950年生まれ。東京外国語大学インドネシア語学科卒業。「勝馬新聞社」「日刊ゲンダイ」で競馬記者。退社後、5年間の専業主婦を経て仕事復帰。85年「気がつけば騎手の女房」で大宅壮一ノンフィクション賞。その後、政府税調などの委員を歴任。テレ朝系「モーニングバード」などのコメンテーターとしても活躍中。

想定外も十分に旅の面白さにしてしまうのです。

以前、男性の友人に「ハノイに5泊する」と話したところ、「5泊も何をするのだ」と笑われました。1泊で十分だと言うので根拠を示せと迫ると「見るべき所が3つしかないから」との答えです。見る“べき”とは一体何事でしょう。「べき」などと言っているから、想定外の出来事があると、とても損をした気分になってしまい、旅を楽しめなくなってしまうのです。女性にとって、男性と一緒に旅を楽しむのは到底無理だと気づいてしまったから女同士の旅が増えちゃう。でも男同士の旅は増えないですね。

佐良直美さんが1969年にヒットさせた「二十一世紀音頭」という歌を、30代の知り合いに教えてもらいました。その歌詞は、31年後に迎える21世紀には、火星や金星にも旅できるような世の中になっているのだろうか、皆が幸せに平和に暮らしているのだろうか、というような内容です。しかし現実の21世紀は、エボラ熱の流行やテロなどによって、むしろ行けない場所が増えています。旅の世界が狭くなってしまいました。平和な世の中があつての観光なのだ、あらためて実感させられました。旅の世界を小さくしてしまわないよう、私たちが旅が自由にできる環境を守るための努力もしないといけないのかもしれない。